

18-10 授業解題

島名：グローバル・イシュー

教科（領域）：社会

単元（教材）：「世界のみらいと日本の役割」

対象：附属桃山小学校 6年1組

授業者：若松 俊介 先生

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

本授業は SDGs を参考にして、環境、貧困、平和などの様々なグローバルな課題について、子どもたちが資料を探し、それをもとに、課題解決のための提案を自分達で考え表現する学習活動である。グローバルな課題の解決に子ども自身がどのように関わるかを視野に入れている。

本授業のはじめに、各グループにおいてはそれぞれの課題解決についての提案を確認し、その後に各グループから一人ずつが参加する提案会議を行った。提案会議では、各自が持ち寄った課題解決について提案し、それへの質問に答える活動が中心となる。その後再び自分のグループに戻って、提案会議で他の子どもからももらった意見を出し合って、自分のグループの提案について修正を行う、という学習活動であった。

本授業の強みとしては、グローバルな課題について「自分たちの思いを伝えて終わり」ではなく、子どもたちがグローバルな課題について考えたことを出し合って共に解決法を考える。さらに、様々な見方で考えることで課題解決法が変化していくことを実感することも目指している。世界が急激に変化する時代に生きる子どもたちにとって、課題発見と課題解決の方法を考えることが強みと言えよう。

新しい「学びのスタイル」として、グループ内及びグループ間で課題解決に向けての提案を聴き合うことで、お互いに足りない考えを補い合えるようなグループ編成が組織されていた。子どもたちは自分のグループが選んだ課題の解決だけを考えるのではなく、他の班の人に発表し、他の班の発表を聞くプロセスで、SDGs の課題群の解決方法を全体的に捉えることが可能となっている。対話的で主体的な深い学びの実践例（2017年学習指導要領の実施）といえよう。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

本単元の学習は、それまでの学習の成果が積み上がって可能となった学習活動と見なされる。社会、国語、理科、総合、台湾交流学习など、複数教科などでの学習が関連づいて成り立っている。授業者によれば、それぞれの学習時において出てきたグローバルな話題や課題が、子どもの中で少しずつつながる過程で、「国際的な課題はどのようなものがあるのか」「国際的な課題をどうすれば解決できるだろう」といった問いが自然と生まれたとされる。グローバルな課題はもともと簡単に解決できるものではない。しかし、6年生の児童におい

て、世界の現状を調べ考え、課題を整理し、解決方法を提案することが可能であるという実践事例であった。

付け加えると、本授業では附属桃山小学校に設置されている「メディア科」が果たした役割が大きい。子どもたちが各班の課題解決を提案するとき、PC タブレットを利用して、写真や図表を用いてわかりやすく説明したことは評価できよう。メディア科で育成された情報活用能力を、グローバル・イシューの課題解決学習に利用したところに、情報化社会の中でグローバル・スタディーズが目指す方向性が見られた。